

男子青年の自我発達

教育心理学研究室 佐々木 正 宏

Ego Development of Male Adolescents

Masahiro SASAKI

This study is based on the theory and measurement technique of ego development proposed by Loevinger

The purposes of this study were as follows;

- to investigate the age-developmental trend, and to describe the manifestations of ego development, through the construction of the scoring manual for male adolescents.
- to discuss some problems for future exploration.

Their stages increased with age. They were classified at lower stages than female adolescents. Moreover, their stage characteristics are described. There were many kinds of characteristics in low stages, but fewer in high stages.

Construction of complete manual was recommended, and the problems about qualitative differences between high stages and universality of high stages were pointed out.

I 問 題

自我及び自我発達の概念の歴史は古いが、現在でも人格心理学や臨床心理学において欠くことのできないものになっている。その中で、Loevinger (1966, 1969, 1976, 1978) の自我発達の理論と測定手法が注目されてきている。

Loevinger (1966, 1976) は、明確な定義ではないが、自我は、人が自分や世界を意味づけする枠組みであると考えている。そこでは、意味の探求、経験の統合といった働きが重視されている。自我は、自分や他者に対する態度、問題に対処するための方法、問題についての意見等を含んでいるのである。

自我は、発達の観点を取り入れてこそ良く理解できる。自我は未分化で単純な段階から分化し複雑な段階までの連続体を成している。それぞれの段階は他と質的に異なり、一定の順序でおこる。

Loevinger (1966) は、対人関係統合の研究 (Sullivan et al., 1957)、性格発達の研究 (Peck & Havighurst, 1960)、道徳性の研究 (Kohlberg, 1964) 等を参考にし、7段階に渡る自我発達の特徴を要約している。しかし、その後の検討で、さらに3つの過渡的段階が加えら

れてきている (Hauser, 1976)。この自我発達段階の特徴は、表1に示す通りである。個々の特徴のうちで、とくに目新しいものはない。それぞれは殆んど人格心理学や臨床心理学で以前から取り上げられてきたものである。自我発達理論の独自性はこれらを自我発達という大きな枠組みの中に包括したことにあると考えられる。また、表1では衝動統制と性格発達、対人関係スタイル、意識的とらわれ、認知スタイルという側面に分けて特徴が列挙してあるが、これらの側面の分類はとくに重要なものではない。Loevinger (1966) は、この自我発達の研究領域に関与するほど、それらがまさに1つのものの側面であることがわかっていくとしている。その1つものを言い表すのに自我という語が必要となってくるのである。なお、Loevinger (1976) は上記の参考となった研究における段階や性格タイプと自我発達段階とを対応させているが、それは、表2に示されている通りである。

Loevinger (1965, 1966, 1976, 1978) は測定を極めて重視している。彼女は、自我発達の測定の厳密さというより、理論と測定の調和を旨ざしていると言えるが、その背景となる考えを2、3述べる。

自我発達の先駆的概念に Loevinger が到達したのは、

表1 自我発達段階の特徴

段 階	衝 動 統 制 性 格 発 達	対人関係スタイル	意識的とらわれ	認知スタイル
前社会的 共 生 的		自閉的 共生的	自己対非自己	
衝 動 的	衝動的 報復の恐れ	依存的, 搾取的 受け入れの	とくに性的・攻撃的な 身体感情	ステレオタイプ 概念的混乱
自己保護的	外在化された非難 見つけられる恐れ 日和見主義	用心深い 操作的 搾取的	自己保護 願望, 物事 利益, 統制	
自己保護的 同 調 的	単純絶対の規則への服 従と同調	操作的 服従的	伝統的性役割の具体的 側面	概念的単純さ ステレオタイプ
同 調 的	外的規則への同調 規則違反への罰悪感 恥	所屬的 皮相的な良さ	社会的受容性 平凡な感情 外見, 行動	概念的単純さ ステレオタイプ 決まり文句
自己意識的	規範の分化 目標	集団に關係しての自己 意識, 援助的	適応, 問題, 理由 機会 (曖昧)	多重性
良 心 的	自己評価的基準 結果への罪悪感 長期の目標理想 自己批判	伝達への関心 責任のとれる 集中的 相互的	分化した感情 行動の動機 自尊, 達成 特性, 表現	概念的複雑さ パターンの考え
個人主義的	付加: 個性の尊重	付加: 情緒的問題とし ての依存	付加: 外的生活から内 的生活を区別, 発達 社会的問題	付加: 過程と結果の区 別
自 律 的	付加: 葛藤する内的欲 求の克服	付加: 相互依存 自律性の尊重	生き生きと伝わる感情 心身の統合, 行動の心 理的原因, 社会的文脈 における自己, 役割概 念, 自己充足	増大した概念的複雑さ 広い視野 複雑なパターン 曖昧さへの耐性 客観性
統 合 的	付加: 達成できないも のの放棄 内的葛藤の和解	付加: 個性の育成	付加: 同一性	

表2 自我発達段階と先行研究における
段階, 性格タイプとの關係

自我発達 段 階	Sullivan ら 統合の水準	Peck と Havighurst 性格タイプ	Kohlberg 道徳性の基礎
前社会的	分離性		
衝 動 的	非自己の分化	道徳と無関係 な	罰と服従
自己保護的	規則 (取りこ み詐欺的)	功利的	ナイーブな道 具的快樂主義
同 調 的	規則(同調的)	同調的	良い関係と是 認
自己意識的	葛藤と反応		法と秩序
良 心 的		非合理的良心 的	民主主義的契 約
個人主義的	連続性	合理的愛他的	個人的良心の 原理
自 律 的	自己一貫性		
統 合 的	相対性		

権成主義的家族イデオロギーの研究 (Loevinger, 1962) の過程においてである。そこでは、固い権威主義的同調性は、低い方の極に混沌とした構造化されていない人格特性をもち、高い方の極に自由で耐性のある人格特性をもつ1つの次元の中間に位置すると考えられた。この次元が自我発達である。

いわゆる能力は、低から高までの、極性の変数 (polar variables) として一般に記述することができるが、自我発達は、表1のように、質的に異なる特徴、つまり Loevinger (1966) の呼び方によれば、里程碑 (milestones) の連続体を成すと考えられる。個々の特徴は、ふつう発達が進むにつれて、まず増大していき、やがてピークに達し、その後減少していく。

表1を見るとわかるように、自分を社会的に望ましいとする傾向は、自我発達の中間にある同調的段階の特徴である。だから、社会的望ましさをの尺度における低得点

には、同調的段階より低い場合の非同調性と、同調的段階より高い場合の、たとえば自己批判の傾向の両者が混在することになる。同様に、精神病理に関する変数においても、低い段階の衝動性と高い段階の内的生活の耐性の両者が混同されることがありうる。

このように、極性が里程碑かという区別は重要なものであるが、極性の変数として取り扱われたから誤りであるというような決定をできるわけでない。しかし、里程碑というのは、直接的に観察をすることが可能であるのに対し、極性の側面は、より間接的で、観察された行動のパターンから推論をしなければならないという相違があり、自我発達を構成している変数の発見や再構成には、里程碑としての側面を重視したアプローチをして行かなければならないと考えられるのである。

従来からの、広義の自我発達の研究者たちの多くは、小学校入学とか結婚というようなかなり年齢固有の問題を、段階と結びつけて考えている。極端な場合には、一定の年齢群の人々が多く示す特徴から段階を構成することもできそうである。しかし、表1を見るとわかるように、それぞれの段階は年齢固有のものにはなっていない。Loevingerは、自我発達の段階が、段階であると共に、個人差をあらわす性格のタイプでもあると考え、両者に共通する抽象という面を重視する。そして、この点から、段階を年齢と独立なものとして構成しようとするのである。この考えの背景となっているのは、知的発達における精神年齢の発想であろう。このように自我発達段階を設定してこそ、ある段階への変化は何才頃おきるかというような疑問に取り組んでいけるのである。

以上の里程碑の側面の重視、年齢固有の特徴の排除以外にもLoevinger(1965, 1966, 1976)は測定論的背景に関する多くの主張をして本格的な自我発達の測定に取り組んでいる。

最も素朴な自我発達の測定方法は、表1に示された特徴と観察された個人の反応とのマッチングである。これが基本ではあるが余りに粗雑である。LoevingerとWessler(1970)、Loevingerら(1970)は、36項目のSCTを測定道具として、自我発達を評定するためのマニュアルを作成している。

SCTを用いなければならない理由はとくにあるわけではない。面接法、TATを測定道具として採用することもできたはずである。ただ、研究者の枠組みを強く反映するいわゆる客観的テストではなく、対象者の意味の枠組みを強く反映する投影法が、理論と測定の調和を旨とし、データに基づいて理論を修正構築していこうとする時、適当だとされたと考えられる(Loevinger, 1978)。

SCTを用いた他の理由としては、投影法の中でも言葉による反応を対象者がすること、実施が簡単なこと、1項目につき1反応でそれぞれの対象者につき一応同数の反応が得られることによって測定に関する問題が起きにくいことがあげられる。

このSCTの各項目への反応を評定するマニュアルを作成することが、自我発達測定の最大の仕事ということになる。最終的に出来上がったマニュアル(Loevinger et al., 1970)は、1,000人以上の対象者によるSCTへの反応に基づき、特徴の記述(各項目の各段階の特徴等を記述したもの)、カテゴリー(各項目の各段階に置かれる反応の分類の短い説明)、反応見本(カテゴリーに含まれる具体的な反応そのもの)から成っている。

このマニュアル作成の規則は主に3つある。

- a 全ての反応を評定する。この最大の理由は、例外なく同じ手続で対象者の段階を算出するためである。
- b 意味の水準に固執する。これは対象者の言うことを正確に把握することであり、無意識の動機や表現されていない意図を推論しないことである。
- c 易しい英語を用いる。これは超自我とか防衛機制という心理学の専門用語を用いないことを指している。

これらの規則に従って、先行する諸々の研究、とくにSullivanら(1957)の段階を参考に、反応を分類するのが、作業の多くを占める。ここでは、反応の正確な理解、先行理論との照合といふかなり直観的な作業と、分類された反応群やカテゴリーが適切な段階に置かれているか等を検討する経験的な作業(Ⅲの方法のところでも述べる)の両者が繰り返し行なわれる。

結局のところ、マニュアルは、段階別に対象者の反応をまとめカテゴリー化し、それに一般的な説明を付加したものだと言うことができる。別な言い方をすれば、マニュアルは表1の特徴をより具体的な水準も含めてまとめてあるのだと言える。だから、マニュアルは、簡潔ではないが、自我発達の定義なのだと思えることができ、この意味で、マニュアルの作成が自我発達研究の中心的課題なのである。

以上のような自我発達の測定手法に基づく研究は、この10年間に数多く発表されている。LoevingerとWessler(1970)、RedmoreとWaldman(1975)、Holt(1980)等は、評定手続や得点(評定値)の信頼性が、ほぼ満足できるものであることを報告している。

妥当性研究としては、Sullivanら(1970)は、青年以下の対象者で、年齢が上るほど、段階が高くなることを

明らかにしている。Redmore と Loevinger (1979) は、ほぼ高校生以下の対象者で、縦断研究を行っている。ここでも、年齢が上るにつれて、段階が上昇していくことが確かめられている。Hauser (1978) は、面接場面における対人行動と自我発達との関係を研究している。一般に、多くの研究が、自我発達理論から予想される結果を得ている。ただ、SCT と他のパーソナリティ検査を行ない、両者の相関を出してみただけという安直な研究もある。

なお、Hauser (1976) は、自我発達に関する実証的な研究を概観し、いくつかの問題点を指摘している。また、Loevinger (1979) は、博士論文も含めて、実証的な研究の概観をしている。

II 目的

イスラエルの人々の自我発達を研究した Snarey と Blasi (1980) が用いた方法はユニークである。彼らは、対象者の反応を全て英語に翻訳し、それを Loevinger ら (1970) のマニュアルに従って評定したのである。しかし、それぞれの国において研究を続けていこうとするためには、Loevinger らのマニュアルを、そのまま翻訳するのではなく基本的には、それをを用い、背景にある数多くの規則に基づいてマニュアルを作成する必要があるだろう。

佐々木 (1981b) は Loevinger に従い女子青年の自我発達を評定するためのマニュアルを作成し、その若干の検討を行った。また、日本における成人男子の自我発達の特徴をまとめた (佐々木, 1981a)。

ここでは、男子青年の自我発達を評定するためのマニュアル作成を通じ、彼らの年齢と自我発達段階の関係を、自我発達のあらわれを記述すること、今後日本で自我発達の研究を行っていく際に出てくる問題点を検討することを目的とする。

III 方法

A 対象者

本研究の対象者は、全部で292名の男子であり、中学生、高校生、大学生、勤労青年から成っている。

14～15才	64人
16～17才	67人
18～19才	85人
20～21才	39人
22～23才	37人

対象者の所属する学校及び職場は、東京都内、神奈川

県内にある。彼らの年齢は、女子青年 (佐々木, 1981b) に比べ多少低い。

B 実施期間、実施場所

実施期間は1981年5月～7月である。実施場所の多くは対象者在籍の学校の教室である。

C SCT

佐々木 (1981b) の用いているのと同じ30項目である (表3)。これらの項目の殆んどは Loevinger と Wessler (1970) の用いている SCT から、自己像、両親像、関心や懸念、対人関係等の側面を引き出し易いと思われる項目を選び翻訳したものであるが、一部の項目は、忠実な翻訳にはしていない。

表3 SCT 項目

1. 私が気の毒に思うのは	18. 私は
2. もし、私のほしいものが手にはいらないなら	19. 人々が助けを必要としているとき
3. 子どもを育てるのは	20. 私が自分自身について気にしているのは
4. 私の父は	21. もし、私をもっとたくさんお金をもっていたら
5. 私にとって大問題になっているのは	22. 母といるとき私はいつも
6. 女性が幸福なのは	23. 大部の男性は女性のことを
7. みんなが私のことを避けるとき	24. 規則とは
8. いらいらするとき私は	25. ときどき私が心配になるのは
9. もし、私の母が	26. 異性といっしょにいるとき私は
10. 母が私をたたいたとき私は	27. 集団活動にひとりの子どもがはいていかないうとき
11. 他人といっしょにいるとき私は	28. 大部分の女性は男性のことを
12. 教育とは	29. 私にとって職業とは
13. みんなが性について話しているとき私は	30. ときどき私が望んでいるのは
14. 私が困っているのは	
15. 母と私は	
16. 男性が幸福なのは	
17. 私が良心のかしゃくを覚えるのは	

D 評定マニュアルの作成手続

用いた段階は、衝動的段階、自己保護の段階、自己保護同調の段階、同調的段階、自己意識の段階、良心的段階、個人主義的段階、自律的段階である。両極の2段階を除いた根拠は、前社会的共生的段階が言語成立より前の段階であって、SCT ではとらえられないとされており、統合的段階は自律的段階に含めて構わないとされているからである。

作成手続は、主として次の通りである。

1. 1項目ごとのリストの作成—1項目ごとの292の反応を、対象者の番号以外の情報がいらないように書き移す。
2. Loevingerら(1970)と佐々木(1981b)のマニュアルに基づく反応の分類—リスト中の反応をまとめカテゴリー化し、段階に位置づける。
3. 対象者の段階の算出—累積規則に基づく個人の段階の算出方法によって、個人の段階を算出する。
4. カテゴリーの検討—カテゴリーの段階への位置づけが正しくない場合がある。たとえば、同調的段階に置かれてあったカテゴリーに含まれる反応をした対象者の段階が全て自己意識的段階であったら、カテゴリーの位置を自己意識的段階に移す。また、カテゴリー自体が適切なものでない場合がある。たとえば、あるカテゴリーに含まれる反応をした対象者の段階があまり多様であるなら、それらの反応が2群以上に分類できるかどうかを検討するのである。
5. 3の対象者の段階の算出と、4のカテゴリーの検討の繰り返し
6. マニュアルの完成—カテゴリーと反応例に、段階の特徴をまとめた説明を付加する。

4と5の作業は、類似の一定の手続をもたない他の理論(たとえば、Kohlberg, 1964)に比べ、自我発達理論を柔軟なものにしている。しかし、この作業を全て経験的に行うと逆に理論が混沌としてくる可能性が大きい。とくに4はあまり厳密に行うべきではなく、表1に述べられている特徴と不一致にならない程度で行うべきであり、本研究も、この規則を採用し、明らかに経験的修正が必要であり、修正後の結果が、表1に矛盾しない場合に、基本的には修正を行った。

IV 結果と考察

年令との関係の検討に用いたのは、マニュアル作成のための対象者(各年令群からランダムに20名ずつ選んだ)である。自我発達のあらわれの反応例は、マニュアルから選んだ。

A 年令との関係

年令群別の段階の分布は、表4に示す通りである。自己保護同調的段階以下の人はいくらかの増減はあるが、年令とともに減少する傾向がある。同調的段階の人は、どの年令でもかなり多いが、20才以上で多少減少する傾向がある。自己意識的段階から個人主義的段階までの人は、

表4 年令群別の自我発達段階の分布

年令	衝動的	自己保護的	自己保護的	同調的	自己意識的	良心的	個人主義的	自律的
14～15才	2	4	2	8	3	1	0	0
16～17才	3	4	1	8	2	2	0	0
18～19才	1	4	0	8	5	2	0	0
20～21才	1	2	1	6	4	4	1	1
22～23才	0	1	0	6	8	4	1	0

年令とともに増大する傾向がある。自律的段階の人は、20～21才の年令で1人だけ見られる。これらから、ほぼ年令が上るにつれて段階も上昇していくと言えそうである。しかし、この傾向は、女子青年の場合(佐々木, 1981b)よりも、明確になっていない。また、全体の段階の分布を見ると、女子青年の場合より、低い段階の人が多い。

B 自我発達のあらわれ

1. 衝動的段階

この段階は、SCTという測定道具を用いて到達する最も低い段階である。この段階の人は、成長する自己の感覚を「いいえ」という言葉によって主張する。彼は衝動によって支配されているので、この段階は衝動的段階と呼ばれる。

反応例—

- a 「もし、私のほしいものが手にはいらないなら—死ぬ」
- b 「子どもを育てるのは—いや」
- c 「私の父は—父さんです」
- d 「もし、私の母が一死んだら私も死にます」
- e 「母といるとき私はいつも—呼吸する」

この段階の人は、bのように、好き—嫌い、良い—悪いという単純な2分化をして世界を眺める傾向がある。a, dのように(欲求が満たされない場合に)自己破壊、自己拒否をおこす。eのように、概念的な混乱を起こしているとき考えられないこともある。さらに、cのように同義反復で答えることも多い。彼の感情は強烈だが、生理的なものと見ることもできるくらい未分化で「狂う」、「熱くなる」という反応をする。また、彼にとっては、他者は第1に自分に何かをしてくれたり、与えてくれたりする人なのである。

女子青年の場合、この段階では、肯定的側面はあまり見られず、全体的に抑うつ的な調子になっていたが、こ

ここでは、未分化な肯定的反応も多い。Loevinger らのマニュアルにかなり似通っていると言える。

2. 自己保護的段階

この段階は、以前は日和見的 (opportunistic) 段階と呼ばれていた (Loevinger, 1966)。しかし、その後の段階の様々な特徴の検討から、この衝動統制に向けての第1歩であると考えられる段階は、自己保護的と名付けられた。臨床心理学的な関心を引くのは、この段階の人が、Sullivan (1953) の言う悪意ある変形 (malevolent transformation) を経験しているのだろうという点である。

反応例一

- a 「もし、私のほしいものが手にはいらぬなら一親にねだります」
- b 「教育とは一勉強させること」
- c 「私が困っているのは一このプリントです」
- d 「人々が助けを必要としているとき一しらんぷりするのが一番よい」
- e 「もし、私がもっとたくさんお金をもっていたら一女を買う」

この段階の人は、dのように、困難の外に身を置き、自分を守ろうとする。彼は、世界には支配する人とされる人、強制する人とされる人がいると考えているようである。bはその1例である。aのように、他者を上手に操つり、彼から何かを奪い取るという態度も強い。この態度は、衝動的段階の人の、他者を自分に何かしてくれたり、与えてくれたりする人間とみなす態度と区別しにくい。この自己保護的段階の人の方がより積極的な外界への働きかけをする点が異なっている。また、彼は、cのように、テスターやテストに対して反感を覚える。eのように、性に対するかなり露骨な関心を示し、それをしばしば誇るといって表現する。

この段階の特徴である、性的な、攻撃的な感情は、女子青年の場合に比べ、かなり多く表現されている。また、女子青年の場合と同様、金というカテゴリーの多くはこの段階に位置づけられた。

3. 自己保護同調的段階

この段階は、3つの過渡的段階の中で、最もその特徴を明らかにしにくい段階である。Loevinger と Wessler (1970) は、同調的段階や自己意識的段階の人にもよく見られるが、同調的段階より低い段階の人に最も頻繁な反応のカテゴリーを、この段階に位置づけたと言っている。ここでは、それらの他に、女子青年の場合にこの段階のものだと考えられた特徴を採用した。

反応例一

- a 「母と私は一一緒に食事をします」

- b 「私が自分自身について気にしているのは一目だ」

- c 「大部分の男性は女性のことを一髪の毛が美しいなど思っている」

この段階の人は、bやcのように、外見や身体、とくにその美醜に関心を抱く。また、aのように、同調的段階の特徴である行動への言及のうちでも、素朴な反応をすることが多い。

女子青年の場合に比べ、外見や身体的美醜への関心はそれほど多くないと考えられる。

4. 同調的段階

この段階は、次の自己意識的段階とともによく見られるものである。段階名は Sullivan ら (1957) にならっている。

反応例一

- a 「私の父は一いっしょうけんめい働いています」
- b 「母と私は一親子です」
- c 「人々が助けを必要としているとき一できるだけ助けます」
- d 「ときどき私が心配になるのは一入学試験のことです」
- e 「大部分の女性は男性のことを一すばらしいものだと思っています」

この段階の人はcのように、自分を社会的に望ましい存在として考える。eのように、他者等を単純に理想化する。aやdのように、他者や世界を、具体的な行動や物事によって述べる。bのように、対人関係でさえ、一般的で平凡に言及する。

女子青年の場合には、この段階以上では、家庭、家族、結婚に関するカテゴリーが多く見られたが、男子青年では、結婚についてのみは殆んど見られない。また、成人男子の場合に見られた、自分を平凡な人間として考える傾向は、それほど顕著なものではなかった。

5. 自己意識的段階

この段階は、自己保護同調的段階と異なり、かなり明確な特徴をもつ過渡的段階である。また、成人の多くが到達する段階であるとも言える。

反応例一

- a 「私の父は一たいへん寛大な人です」
- b 「みんなが私のことを避けるとき一なぜさけるのか考えます」
- c 「他人といっしょうにいるとき私は一とても楽しい時と退屈な時がある」
- d 「男性が幸福なのは一自分の夢を追っている時です」

- e 「私が良心のかしゃくを覚えるのは一人の心を傷つけた時です」

この段階の人は、bのように、比較的素朴ではあるが、反省とか思索の傾向をもつ。aのように、自分や他者を特性によって表現し始める。単純な同調的段階の人に比べて、cのように、多少分化した見方をする。dのように、目的、目標、期待をもち、積極的な探求心を抱き始める。eのように、他者や対人関係に関心や配慮を示す。

成人男子の場合に見られた、協力するという姿勢、社会に関する言及は、男子青年の場合でも、この段階や次の段階で比較的多く見られる。女子青年の場合に見られた、自己抑制や素直さに関する特性の記述は、男子青年でも等価なものが見られるが、素直という表現そのものは数少ない。

6. 良心的段階

この段階は、内在化された道徳性が目立っている点から、良心的段階と命名されている。Holt (1974) は、この段階の特徴が、よく補償された強迫性格とよく似ていると言っている。

反応例一

- a 「私が気の毒に思うのは一社会風習の中でしか生きられない人間たち」
 b 「女性が幸福なのは一生きがいをもち、本当に自分の望む生活ができること」
 c 「他人といるとき私は一その人の立場に立って考えます」
 d 「私が困っているのは一自分にもっと自尊心がなければいけないということだ」
 e 「私にとって職業とは一これからの人生を決める重要な要素の1つである」

この段階の人は、dのように、自分や他者をかなり明確な特性によって述べる。aも同様に、具体的行動等によって自分や他者を説明する同調的段階の人はしない反応である。また、この段階の人は、bやeのように、長期にわたる人生の目標や理想に強い関心を示す。対人関係においては、cのように、明確な他者配慮、コミュニケーションや相互性への関心を抱き、同情や同一化の概念をもつ。他に、概念的複雑さ、強い責任意識、達成動機も、この段階の人の特徴である。

成人男子の場合に見られた、協力の姿勢や社会に関する言及は、前の段階と同様、ここでも良く見られるものである。

7. 個人主義段階

この段階は、3つの過渡的段階のうちの1つである。

この段階以上の人の反応は、ユニークなものが多い。

反応例一

- a 「女性が幸福なのは一ときかかれたらやはり答えに困る。幸福だと思うのはそれぞれ個人の価値観の中にあるからだ」
 b 「男性が幸福なのは一夢を追っている（現実に向けて計画を進めている）時、たとえ夢を現実にしたとしても、もうそこで男は行くところのないさびしさを感じるだろうからこう思うのであります」
 c 「私にとって職業とは一人生の目的を達成するための過程」

この段階の人は、bやcのように、過程と結果を区別し、過程とか変化の方に大きな関心を示す。以前の段階の人たちが、「個人」とか「個性」という言葉によって、あいまいに表現していた個性の問題を、この段階の人は、aのように、はっきりと取り上げる。

この段階の人及び反応は少なく、マニュアルのカテゴリーも Loevinger らのマニュアルに比べ少ない。

8. 自律的段階

反応例一

- a 「私は一ずい分と世俗的にえらくなりたがっているが、一方で十分人間として生きられるかどうか結局一番大事だと思っている。清濁を多少とももち、それに多少とも気づいている人間である」

この段階の人は、人生のいくつかの葛藤する側面を自覚し、そういう葛藤を何とか克服していこうと努力している。以前の段階の人以上に、生き生きとした感情をもち、かなりのあいまいさへの耐性をもつ。aは、この段階の反応の1例である。

この段階の人及び反応も少なく、マニュアルのカテゴリーも、Loevinger らのマニュアルに比べ少ない。

C 今後に向けて

明確な今後の課題と考えられるのは、高い段階（個人主義的段階以上）の情報を十分に含んでいるマニュアルを完成していく方向に進まなければならないことである。全ての段階の情報を十分に含んだマニュアルにしていくためには、結局、老人まで含めたサンプルでマニュアルを再び作成しなければならないと考えられる。

男女別にマニュアルを作成することはどうであろうか。Loevinger と Wessler (1970) は、項目の異なる SCT を男女それぞれに用い、マニュアルも、別々に作成しており、本研究もそれにならったのであるが、表1に示された自我発達段階の特徴は、男女で異ならないはずである。確かに、どちらか一方でしかおきない反応はある

(たとえば「私は一男です」)。しかし、自我発達は意味の枠組みに関するものであって、反応に使われた言葉に左右されるべきではないのだから、男女に共通して使えるマニュアルができる可能性は大きい。

次に、高い段階に関する疑問を考えてみよう。これは、マニュアル作成経験の印象に過ぎないのだが、高い段階(個人主義段階以上)の反応の分類が難しいことがある。ここには、マニュアル作成者や評定者自身の段階が一体どうあるべきなのかという他の問題、つまり、たとえば、ある段階の評定者が、それより高い段階の評定を満足に行えるのかという問題がはいってくる。しかし、この作成者、評定者側の問題以外に、反応の分類を難しくしている要因があると考えられる。それは、ある段階の特徴が、次の段階ではより明確に現れてくるというような表現しかできない場合が、段階が高いほど増えてくることである。言い換えれば、段階間の差が、高い段階では、質的差なのであると言えなくなってくるのである。表1に示されている「付加」という記述も、同様のことを指していると考えられる。つまり、個人主義的段階や自律的段階は、それぞれに固有の特徴をもっているが、良心的段階を基盤として、類似したものになっているのである。こう考えるなら、良心的段階より高い段階については、どれだけ質的差があると言えるのだろうか。

Holt (1974) は、Loevinger が、彼女自身の価値体系、自由な知識人のそれを具現するものとして、自我発達の最も高い段階を設定することによって、その価値体系に特別な客観性を与えようとしてきたのではないかという批判がこころうとしている。Loevinger (1966, 1976) は、自我発達の段階を、多様な先行研究からもってきたのであるから、この批判は必ずしも正しくない。しかし、日本で自我発達を研究する場合、価値体系の差異の問題がはいってくる可能性を考えるべきであろう。この場合、本研究でも用いている経験的修正法(マニュアル作成手順の4, 等。これは段階の一部の特徴の発見や修正に関して有効な手段と考えられる)には限界があると考えられる。

V 要 約

本研究の目的は、男子青年の自我発達を評定するためのマニュアル作成を通じ、彼らの年齢と自我発達段階の関係を見、自我発達のあらわれを記述すること、今後日本で自我発達研究を行っていく際の問題点を検討することであった。

男子青年の場合も、女子青年の同様に、年齢が上るにつれて段階も上昇していた。また、男子青年は、女子青年より低い段階の人が多かった。

段階ごとの自我発達のあらわれに関しては、反応例を中心として、男子青年の一般的自我発達段階の特徴を指摘した。彼らの場合、低い段階の特徴は多く見られたが、高い段階の特徴は十分でなかった。

今後の問題としては、全ての段階の情報を十分に含むマニュアルの作成が必要だと強調され、さらに、男女同一のマニュアルも作成可能だと考えられた。また、高い段階間に質的差が認めうるのかという疑問、高い段階の普遍性を認めてよいのかという疑問が出された。

[指導教官 佐治守夫教授]

文 献

- Hauser, S.T. (1976) Loevinger's model and measure of ego development: A critical review. *Psychological Bulletin*, 83, 928-955.
- Hauser, S.T. (1978) Ego development and interpersonal style in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 333-352.
- Holt, R.R. (1974) Review of "Measuring ego development, Volume I and II." *Journal of Nervous and Mental Disease*, 158, 310-316.
- Holt, R.R. (1980) Loevinger's measure of ego development: Reliability and national norms for male and female short forms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 909-920.
- Kohlberg, L. (1964) Development of moral character and moral ideology. In M.L. Hoffman & L.W. Hoffman (Eds.), *Review of child development research* (Vol. 1). New York: Russell Sage Foundation.
- Loevinger, J. (1962) Measuring personality patterns of women. *Genetic Psychology Monographs*, 65, 53-136.
- Loevinger, J. (1965) Measurement in clinical research. In B.B. Wolman (Ed.), *Handbook of clinical psychology*. New York: McGraw-Hill, 78-94.
- Loevinger, J. (1966) The Meaning and measurement of ego development. *American Psychologist*, 21, 195-206.
- Loevinger, J. (1969) Theory of ego development. In L. Breger (Ed.), *Clinical cognitive psychology: Model and integrations*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Loevinger, J. (1976) *Ego development: Conceptions and theories*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Loevinger, J. (1978) *Scientific ways in the study of ego development*. Worcester, M.A.: Clark University Press.
- Loevinger, J. (1979) Construct validity of the sentence completion test of ego development. *Applied Psychological Measurement*, 3, 281-311.
- Loevinger, J., & Wessler, R. (1970) *Measuring ego development 1: Construction and use of a sentence completion test*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Loevinger, J., Wessler, R., & Redmore, C. (1970) *Measuring ego development 2: Scoring manual for women and girls*. San Francisco: Jossey-Bass.

- Peck, R.F., & Havighurst, R. (1960) The psychology of character development. New York: Wiley.
- Redmore, C., & Loevinger, J. (1979) Ego development in adolescence: Longitudinal studies. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 1-20.
- Redmore, C., & Waldman, K. (1975) Reliability of a sentence completion measure of ego development. *Journal of Personality Assessment*, 39, 236-243.
- 佐々木正宏 (1981a) 成人男子の自我発達 東京大学教育学部教育相談室紀要, 4, 131-137.
- 佐々木正宏 (1981b) 女子青年における自我発達の測定 教育心理学研究, 29, 147-151.
- Snarey, J.R., & Blasi, J.R. (1980) Ego development among adult kibbutzniks: A cross cultural application of Loevinger's theory. *Genetic Psychological Monographs*, 102, 117-157.
- Sullivan, C., Grant, M.O., & Grant, J.D. (1957) The development of interpersonal maturity: Applications to delinquency. *Psychiatry*, 20, 373-385.
- Sullivan, E.V., McCullough, G., & Stager, M. (1970) A developmental study of the relationship between conceptual, ego, and moral development. *Child Development*, 41, 399-411.
- Sullivan, H.S. (1953) The interpersonal theory of psychiatry. New York: Norton.